

大変まとまりのない話で恐縮です。

【レポート】

社会保障・科学・倫理

社会保険大学校教授 広井良典

塩野谷先生から「社会保障・科学・倫理」という壮大なテーマを与えられて、はたしてそういったお話ができるかどうかと思いましたが、私は去年の7月から社会保険大学校というところに厚生省から出向していて、ここ数年は医療経済という関係のことを主としてやっていましたが、学部時代の専攻が科学史、科学哲学という、理科系と文科系の間みたいなことをやっていたので、そういったことにも引っかけて、社会保障・科学・倫理というのは、非常に大きすぎるようなテーマですけれど、お話をさせていただければと思います。

最初のほうは倫理というあたりに関する話ですが、まず図1をご覧ください。これは最大寿命と性成熟年齢との関係ということで、横軸が性成熟年齢、いわゆる性的に成熟、子供が産める年齢、縦軸が最大寿命の相関とを見たもので、ほかはだいたい主として哺乳類が出ていますが、人間だけがやや特異な地点に立っている。端的に言えば性成熟年齢に対して、最大寿命が非常に長いという特徴がある。

生物の一生というのは、生物学的な見方をすると3段階に整理されていて、成長期、生殖期、それから後生殖期ということになる。端的に言えば、ヒトという生物は後生殖期が非常に長い。通常の生物であれば、生殖期を終えると個体としては死んでいくわけだが、ヒトというのは非常に後生殖期が長い。後生殖期というのはすなわち、高齢期ということであって、ここらへんに高齢化の問題との接点があるかと思うわけである。

すなわち、純粋に生物学的な見方をすると、生

物としての存在理由は、子孫を、あるいは最近では遺伝子をとというふうにいわれますが、自分の遺伝子のコピーを後代に残すことが、生物本来の機能だとすると、生殖期をもって完結するわけだが、いま申しましたように、ヒトというのだけは非常に長い後生殖期を生きるわけである。

たとえていうと、サケなどが産卵をすると、すぐ死に絶えるわけだが、そういったようにヒト以外の生物というのは、個体としての自立性というのはほとんどなくて、最近動物行動学などでいわれるように、個体は遺伝子の乗物にすぎない、遺伝子の専横に支配されているだけだということがいわれるわけだが、哺乳類、特にヒトに至っては、そういった遺伝子の専横というか、支配から、個体というのがかなり独立した機能をもっている、そういう位置付けをもっているということがいえるわけである。

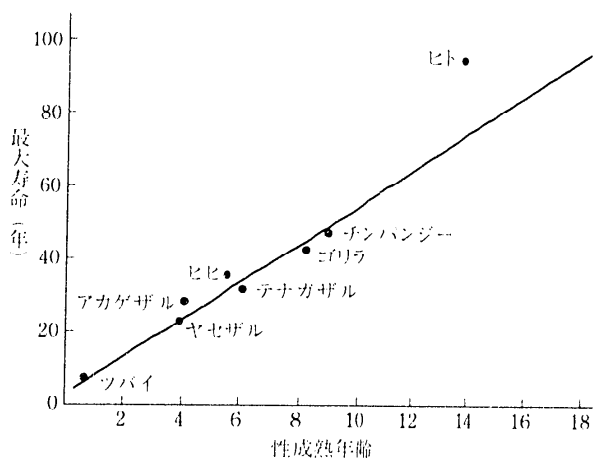


図1 最大寿命と性成熟年齢との関係

そういった後生殖期というものが、もともと生物としてのヒトに長いものとしてあるわけだが、そういった後生殖期が普遍化した時代ということで、高齢化社会というのは基本的にとらえられるのではないかと思う。そういう意味では大げさにいえば、生命の歴史から見ても、後生殖期が普遍化した時代としての高齢化社会というのは、かなりヒト独自のものであるし、かつてなかった社会といえるわけで、そういう意味では非常にポジティブなというか、そういうふうにとらえられるべき時代であるかと思う。

ただ、同時に生物本来の機能からすると、生物としての機能維持がポジティブに保たれるような保証があるのは、生殖期までであるので、全体的な生理的機能というか、そういうものが後生殖期に至るとどうしても不可逆的に低下してしまうという面がある(図2)。

そこで最近、先ほども高齢者の介護の話が何回か出ましたが、「老人の患者」というよりは、むしろ「高齢の障害者」ととらえたうえで、高齢者の場合は生理的な機能が不可逆的に低下するので、若い人の治療ケアと同じように、何でもかんでも治療しようとする、生物としての原理的な難しさがあるということで、それを障害ととらえたうえで、残された機能を活用して、全体としてのQOLを、生活の質を改善していくべきであるという、こういう議論が非常に活発に出されてきているわけである(図3)。

同じことであるが、そういった意味では、ここに「医療モデルと生活モデル」と題してあるが、疾病というものをターゲットにして、それを治療するという医療モデル、病院で中心に行われる医療モデルに対して、むしろ障害をターゲットにして、自立あるいはQOLの向上を目標とした、かつ異職種によって提供される生活モデルという、こういった方向性が、現在の介護の議論においても、基本的な発想になっているということがいえるのではないかと(図4)。

そこで、社会保障・科学・倫理の、倫理というところに、この問題を引き付けて考えてみると、ともすれば個体の利己性というものと倫理性とい

うものは、個人が先か社会が先かという議論は従来からずっとあるけれど、最近のそうした生物学的な知見に仮に基づくとなると、かなり個体の利己性というものと倫理性、あるいは共同体的なものとか、そういったものはパラレルに成立するという面が大きいのではないかということである。

すなわちヒト以外の動物、あるいは下等生物にさかのぼって考えると、そういったプリミティブな段階ではむしろ、遺伝子が支配していて、それが行動の単位となっていて、その中から単細胞、多細胞、免疫系の発達というものを経て、個体というものがある。遺伝子の行動に対して自立するものが、先ほどいったような哺乳類、さらにはヒトに至った段階で、それが脳の発達だとか、あるいは親から子への学習というようなことであるとか、それを支える群居性ということとか、そういったものとパラレルに成立するわけである。

そういった流れを見ると、個体が利己性をもつ、個体が個体として自立することと、倫理性、社会性が発達するということが、生物学的な視点から見ると、かなりパラレルに成立するということが指摘できる。したがってその限りでは、個体

-
- ・生物としての存在理由があるのは生殖期まで
.....ヒト以外の生物
 - ↓
 - ・ヒトのみは長い「後生殖期」を生きる
.....遺伝子からの個体の自立
 - ・「後生殖期」が普遍化した時代としての高齢化社会
 - ↓
 - ・しかし後生殖期については生物としての機能維持のための「保証」がなく、生理的機能が不可逆的に低下
-

図2

-
- 老人の「患者」=高齢の「障害者」
 - 生理的機能が不可逆的に低下
.....遺伝的プログラムとして不可避
 - ・やみくもな「治療」は原理的に困難
 - ・疾病・障害との共存、残存能力の活用を通じたQOL向上が重要
-

図3 老人ケアについての基本的視点

	医療モデル	生活モデル
目的	疾病の治癒, 救命	生活の質 (QOL) の向上
目標	健康	自立
主なターゲット	疾病	障害
ゲット	(生理的正常状態の維持)	(日常生活動作能力 ADL の維持)
主な場所	病院 (施設)	在宅, 社会 (生活)
チーム	医療従事者	異職種

図4 医療モデルと生活モデル

の利己性と倫理性をどちらが先かというようにとらえるよりも、むしろそういった同時並行的に成立するものだととらえるべきではないかと思うわけである (図5)。

この点と先ほどの高齢化社会、あるいは高齢期というものが、人間に独自のものであるという点を取りあえず押さえておいて、ちょっと科学というところに関連することについて、少しだけお話しできればと思う。

17世紀に科学革命というのが起こって、その後の展開を見ると、きわめてラフな整理をすると、次のようなことがいえるのではないかと思う。

この場合の科学というのは、どちらかという自然科学を念頭に置いているが、社会科学というのもきわめて自然科学と相互作用をしながら発達してきたものであるの、社会科学も念頭に置いているわけである。

まず、近代社会でいわゆる古典的な科学というものの世界像というものが成立した。ニュートンの古典力学、絶対時間と絶対空間でニュートンの3法則が貫徹するような自然像が描かれて、カントの認識論を科学史などではニュートン力学の哲学版という形でいわれたりするが、そういった絶対時間、絶対空間というのを前提として、その中で個人がいわば真空中の中でというか、行動するような哲学、認識論、そういったものも成立した。それときわめて世界観を共有するような形で、いわゆる古典派の自由放任の経済学が成立した。非常にこれらは相互に関連していたというふうにいえるかと思うし、当時の市民階級の勃興というのを背景に出来上がった世界像であったといえるわ

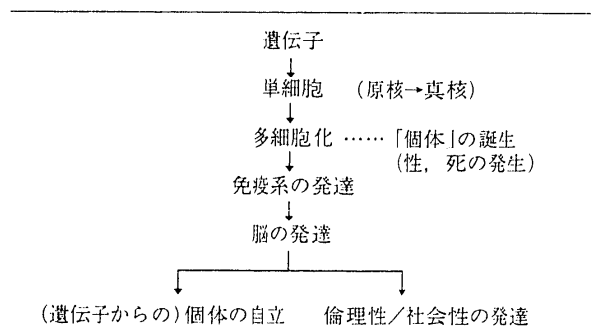


図5 「個体の利己性」と「倫理性」はパラレルに成立する

けである。

それが、きわめてラフな整理としては、その後二つに分かれて、片方が中心を占めるようになったということがいえるのではないかと思う。それがここに書いている左側の主観主義、静的、非歴史性ともいうように特徴付けられるような見方である (図6)。それに対して客観主義、動的、歴史性というものを対置しているけれど、新古典派のいわゆる個人の効用というものに基づくところであるとか、あるいは自然科学の場面では、マッハという人が19世紀に出て、ニュートン力学の中で、たとえば力というような非常に実体的な、そういった概念を退けて、純粋に記述的なものとして物理学を立て直すというような試みをしたわけで、それに基づいて絶対空間、絶対時間の否定というようなことから、さらには相対性理論というものも出てきたし、量子力学という場合でも、非常に個人の観測とか、主観的な次元が重視され、そちらの方向から世界を組み立てるような、そういうものが特に20世紀においては優位を占めたといえるのではないかと思う。

もともと19世紀でもマルクスであるとか、熱力学に代表されるようなむしろ客観主義、動的、歴史性という、こういったもので特徴付けられるような系列があったわけですけど、基本的には20世紀になって、優位を占めたのは、いま申しましたように左側の系列であったと思うのだが、最近の科学の動向を見ていると、そういった個人の認識とか自立性から出発して組み立てるような

考え方に対して、進化生物学とか、あるいは現代の宇宙論、ビッグバンから始まって、宇宙は均一な世界がずーっと続くようなものではなくて、むしろ宇宙にも歴史があるという、そういった客観主義、動的、歴史性ともいうような、すなわちシステムの中に個人とか、あるいは自然の中に個人とか人間というものを包含されるようなものとしてとらえるという、そういった見方が次第に優位になってきているような、前面に出てきているような、そういう傾向があるのではないかと考えるわけである。

以上の科学についての見方から、少しまとめていきたいと思うわけだが、一つ基本的な視点として、ここに日本の長期的な人口の推移というグラフを示しました(図7)。これを見ると、非常に特徴的であるのは、江戸時代の終わりぐらいまでは、ほぼ人口が横這いの社会が続いたわけで、それがずーっと変わらなかったわけだが、江戸時代の後期から近代化がスタートして、人口曲線が急にほとんど直立するような、そういう社会がこの百数十年間は続いたわけである。

この人口増加の歴史がすなわち近代化、あるいは産業化の歴史であったといえるかと思うが、それが今後の見通しとしては、出生率が2.08と、人口置き換え水準までいまの1.5から回復して、だいたい2010年ぐらいをピークとして、ようやく人口が横這いの社会になる。現在の1.5の出生率が続くと仮定すると、人口が6,70年で半減するような社会になる。それを歴史の変曲点とちょ

っと比喩的に書いているが、そういった意味では、江戸時代の終わりから明治時期の近代化がスタートして、急に人口カーブが変わったその変化と同じぐらいの変化を、この10年、20年に私どもは体験することになるわけで、これは先ほどの高齢化ということと重なり合ってくるわけだが、社会のシステム全体の変化が求められるという、そういう変化ではないかと考えるわけである。

ちょっと先ほどの話との関連も踏まえて申し上げると、冒頭にお話ししたように、もともと自然というか、遺伝子のロジックで支配されている世界から、個体あるいはそれとパラレルに共同体というものが成立したのが、人間のレベルであって、自然と人間という、こういう2分化が生じたわけである(図8)。それがさらに近代社会になると、その2段階であったところからさらに、個人というものが、それをAというふうにしていますが、自立した。すなわち個人、共同体、自然という、3層構造になっているわけで、先ほどの科学の話でいくと、このAの個人から、主観性の側から出発して物事を組み立てる、そういう見方が中心となったし、かつこの個人、共同体、自然というのを、別の切り口から見ると、経済、広義の福祉、あるいは公的部門、それから環境ということになるかと思うけれど、かなりAの個人の部分が自立した、市場が自立したような、そういう社会として近代社会というものが、これまで展開してきたということがいえるかと思うわけである(図9)。

ところが、先ほど見ましたような、非常に大き

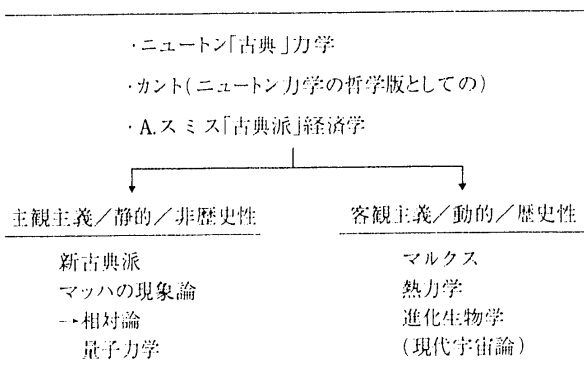


図6 近代科学の「古典的」世界像

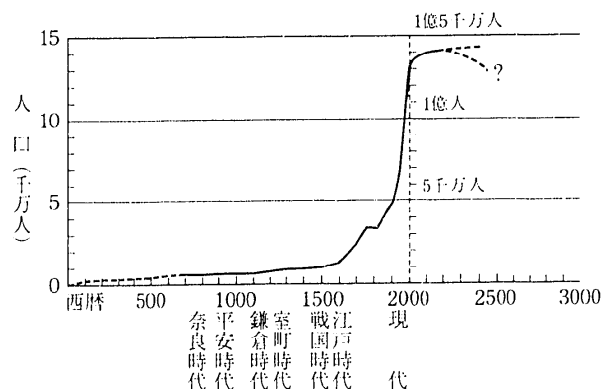


図7 日本の長期的な人口の推移

なシステムの変動期に当たって、では今後の社会保障を考える場合、どのような基本的視点があり得るかということだが、第1点はA, B, C, 個人, 共同体, 自然, あるいは経済, 社会保障, 環境と, こういうふうに三つに区分して考えた, この三つのレベルの, いわば相互依存性が非常に強まってくるのではないかということである。

これは個人という, 上の上層部を切り離して見るのではなくて, システム全体としてとらえる見方が, 科学において前面に出てきているということとも, 一部重なるかと思うけれど, たとえばその典型が, 環境問題であるかと思うが, 環境問題と高齢化問題というのを, パラレルに考えてみると, このいちばん上の個人の部分と, いちばん下の自然, 言い換えると経済と環境, これの関係が問われているのが, いわゆる環境問題で, この上の二つ, すなわち経済と社会保障, あるいは公的部門の関係が問われているのが, 高齢化問題というふうにとらえられるのではないかと思う。

最近の場合は環境問題, すなわち経済と環境の観点については, たとえば持続的な発展, サステイナブル・デベロップメント, すなわちこれまで経済と環境というのは, 対立するものとしてとらえられてきたけれども, タイムスパンを長く取れ

ば, むしろ公害の社会的コストの問題であるとか, 資源の枯渇の問題であるというふうに, 経済と環境の相互依存性, あるいは車の両輪のようなものであるという, こういう視点が出てきている。

それと同じような議論が, 経済と社会保障との関係についても, 何らかのそういった理論枠というか, が必要なのではないか。すなわち文明論的な視点というか, としての高齢化問題, あるいは経済と社会保障との関係のとらえ方が必要ではないかという感じがしている(図10)。

最近では, 佐野先生のお話にもあったように, たとえば育児とか, 介護サービス充実の経済効果という, 福祉の経済効果ということがいわれるようになってきている。もちろん経済効果という, プラスばかりではなくて, 当然負担という面があるわけだが, もう少し, いずれにしても, ダイナミックなとらえ方が必要になっているのではないかという感じがする。

もう一つの相互依存性の強まりという点については, 結局いままでAの, 個人, 経済の, あるいはマーケットの領域を自立したものとしてとらえられたのは, 結局は健康な若い個人というものが前提であったかと思うわけで, 高齢化がどんどん進んでいくと, 健康な若い個人を前提とするマーケットというものが, 非常に成立し難くなるという面が大きくなると思うので, そういった意味でも, このAとBとCの, 経済, 社会保障, 環境, あるいは個人, 共同体, 自然について新しい視点が必要になっているのではないかという感じがしている。

それから, これが最後であるが, 以上のこととちょっと矛盾するような感じもするかもしれないが, いま申し上げたA, B, Cという, 個人, 共同体, 自然の3層が連続化している中で, むしろ逆に公私の役割分担を峻別していく必要性が高まっているのではないかということである。

というのは, ここでケインズ政策, それから社会保険, それから産業政策というのを, 三つ並べて書いてあるが, これはあまりにも乱暴といえ, 乱暴であるけれど, 共通している面があるわけで, いずれも市場を修正する, 補完するために, 政府

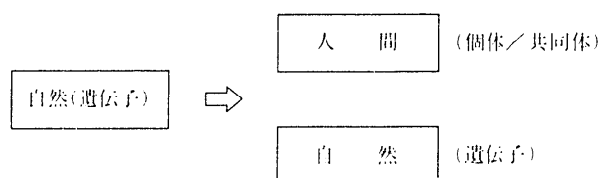


図8 自然(遺伝子)からの個体の自立

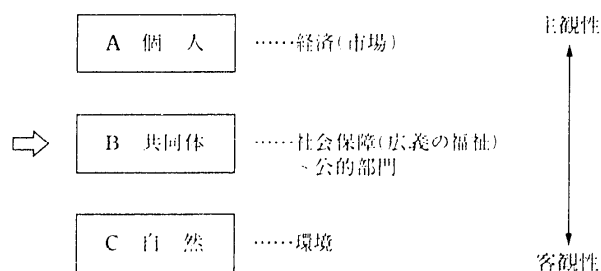


図9 共同体からの個人の独立(近代)

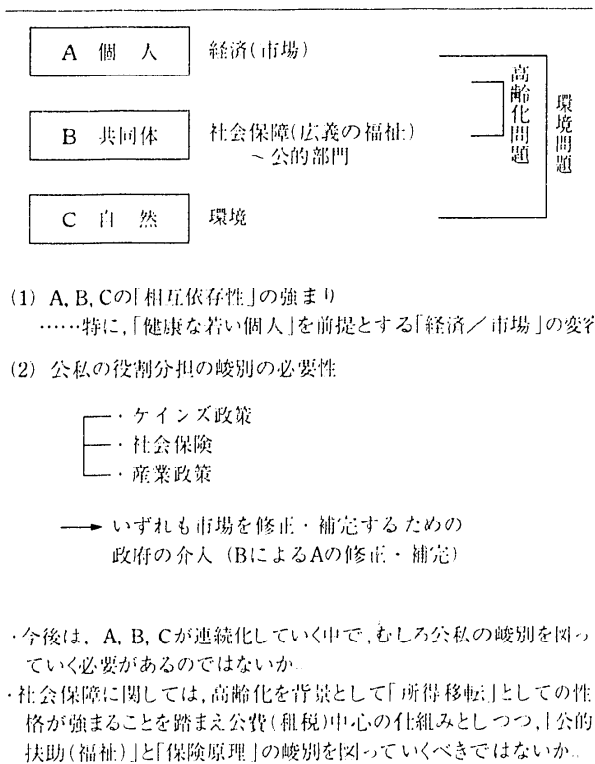


図10 今後の社会保障を考えるに当たっての基本的視点

が介入するわけである。ケインズ政策しかり、社会保険しかり、産業政策しかりである。

社会保険はドイツではじめて成立をした。当時の後進国たるドイツでなぜ社会保険がはじめて成立したのかということだが、理由の一つとして、民間保険が必ずしもイギリスその他の先進国に比べて、十分発達していなかったという、そういった経緯があるかと思うが、社会保険というのも、そういう意味では、こうした市場を補完する政府

の介入ということにとらえられる面があるかと思う。

今後は、一つはそうした公私の峻別を図っていく必要があるのではないかということだが、特に社会保障に関しては、先ほど来お話ししているように、高齢化ということがどんどん進んでいく中で、社会保障というものの性格がかなり、貝塚先生もお書きになっておられますが、貧困を対象にした社会保障というものから、高齢者を主たる対象とするものへと社会保障の存在理由、性格がかなり大きく変わっているわけで、すなわち保険の装いを取っていても、所得移転という性格に、実質的に税に近い仕組みが大半なものになっている。そういった状況を考えると、むしろ社会保障に関しては、公費、税中心の仕組みとしながら、そういった公的扶助ないし福祉と保険原理というものの峻別を図っていくことが求められているのではないか。

特に日本の制度の場合は、社会保険の網を全体にかぶせたうえで、実質的にかなり所得移転、あるいは福祉の原理が大幅に入ってきているという、渾然一体の仕組みとなっているのを、もう少し峻別して、所得移転の部分は所得移転の部分、保険原理の部分はむしろ競争原理をもう少し導入するなり、峻別を図っていく必要があるのではないか。

すなわち、高齢化社会の社会保障の姿としては、むしろ公費を中心とした所得移転ということに着目したベーシックなものを中心に、組み立てていくべきではないかという感じがしている。

非常に論点があちこちに飛びましたが、以上をもちまして発表を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。